衞藤瀋吉先生のオーラル・ヒストリー

平 野　健一郎

はじめに

本書は，1957年頃，当時東洋文庫研究員であられた衞藤瀋吉先生（1923年11月16日−2007年12月12日）が，東洋文庫近代中国研究委員会のメンバーの１人として提案し，試みられたオーラル・ヒストリーの「成果」である。2018年頃，近代中国研究班の初期の研究成果物を整理しておられた東洋文庫研究員・本庄比佐子氏が，戦後初期の録音機械で用いられたオープン・リール４巻を「再発見」され，併せて，当時の近代中国研究委員会の議事録の中に，その機器を活用してオーラル・ヒストリーの手法を用いる研究活動を開始することを提案するプロジェクト案を見つけられたのである。それが衞藤先生の研究プロジェクト案であり，再生機械にかけたオープン・リールからは約60年前の若々しい衞藤先生のお声が流れ出したのである。

「何故衞藤先生が荒木貞夫をインタビューしたのか」。これが近代中国研究班の責任者である久保亨氏から筆者に寄せられた問いである。この問いには，「衞藤先生がオーラル・ヒストリー・プロジェクトに込めた狙いは何だったのか」，「成果も未発表であり，未完のプロジェクトで終わったのは何故か」，「衞藤先生が選りに選って荒木貞夫を選び，しかも未完のインタビューに終わらせたのは何故か」といった問いが含まれている。本書に論考を寄せられた３名の戦後世代東洋学研究者も同じ問いを発しておられるが，久保氏に指摘されたように，1950年代の当時から身近かで謦咳に接した者の１人として，筆者には独自の記憶もあり，独自の視点を提供する責任もあるであろう。そう考えて，久

保氏の要請にお応えすることとした。

1　東洋文庫と衞藤先生

「身近かの視点」ということで，まず衞藤先生ご自身の当該時期のご履歴とご業績を摘記する（主として平野健一郎・石井明編，『衞藤瀋吉先生　人と業績』1984年４月７日）を参照。また，『衞藤瀋吉著作集』全10巻及び別巻［総索引・総目次ほか］（東方書店，2003年11月～2005年11月）も，各巻巻末の鼎談【著者に聞く】を含め，貴重な情報を提供する）。

1943年　10月，東京帝国大学法学部政治学科入学。12月１日，学徒動員，現役兵として歩兵第13連隊補充隊に入隊。歩兵砲中隊の二等兵。

1944年　２月１日，熊谷飛行学校に入校。３月１日，兵科甲種幹部候補生。９月１日，陸軍通信学校に入校。

1945年　３月31日，陸軍通信学校卒業。在広島大本営第二通信隊配属。８月６日，原子爆弾に被爆。９月１日，予備役，臨時召集により引続き大本営第二通信隊に応召，少尉。９月10日，召集解除。復学（被爆後遺症に苦しむ）。

1946年　高木八尺教授「米国の東洋政策」演習に参加，影響を受ける。

1948年　東京大学東洋文化研究所への採用内定。３月31日，東京大学法学部政治学科卒業。４月１日，東京大学大学院入学，岡義武教授の指導により政治外交史を専攻。

1949年　１月10日，東京大学大学院退学，文部教官３級，東京大学東洋文化研究所勤務発令（指導教官植田捷雄教授）。５月31日，文部教官３級を改めて東京大学助手。７月16日，結婚。

1950年　５月，長男誕生。

1951年　11月，長女誕生。

1952年　この年，助手論文「阿片戦争以前における英国商人の性格」（『東洋文化研究所紀要』第３冊，東京大学東洋文化研究所，1952年）発表。

1953年　11月16日，東京工業大学助教授（政治学担当）に昇任。東京大学東洋文化研究所研究員併任（61年3月まで）。

1954年　この年，第2助手論文「砲艦政策の形成――一八三四年清国に対する」（1）（『国際法外交雑誌』第53巻第3号，1954年8月）；「ジャーディン・マジソン商会」（『世界史講座』4，東洋経済新報社，1954年）公刊。

1955年　11月，次女誕生。この年，「砲艦政策の形成――一八三四年清国に対する」（2）（『国際法外交雑誌』第53巻第5号，1955年4月）印刷公刊。

1956年　8月1日，東京大学教養学部助教授併任（58年3月まで，東アジア国際政治史講義及び演習を担当）。10月，アジア政経学会理事（1984年まで）。12月，日本国際政治学会理事（1984年まで）。この年，「ミッチェル報告書について」（『東洋文化』第20号，1956年1月）；「中国共産党と抗日民族統一戦線方式（1931年−1935年）」（『アジア研究』第3巻第1号，1956年）；『立ち上がるアジア』（『世界史の人びと』8，筑摩書房，1956年）公刊。

1958年　9月1日，東京大学教養学部助教授に配置換え，引続き現代社会第二講座を担任，東アジア国際政治史講義及び演習を担当。10月，東京大学大学院社会科学研究科国際関係論課程において国際関係史講義及び演習を担当。11月5日，カナダ，アメリカ合衆国，イギリス，オランダ，フランス，西ドイツ，ユーゴスラヴィア，キプロス，レバノン，インド，ビルマ，マラヤ，中華民国，香港等へ出張（ロックフェラー財団研究費により，アジア研究状況視察のため）。この年，「清朝体制の弛緩とアヘン戦争」；「アヘン戦争と太平天国」（『世界史大系』14，誠文堂新光社，1958年）；「ヨーロッパ近代との政治的対決」（『東洋思想講座』1，至文堂，1958年）；「中国最初の共産政権――海陸豊蘇維埃史――」（近代中国研究委員会編『近代中国研究』第2輯，東京大学出版会，1958年）；「中国に対する戦争終結工作」（日本外政学会編『太平洋戦争終結論』東京大学出版会，1958年）公刊。

1959年　11月4日，帰国。この年，「南京事件と日・米」（斎藤眞編『現代アメリカの内政と外交（高木八尺先生古稀記念）』東京大学出版会，1959年）公刊。

1961年　4月，東京大学東洋文化研究所研究担当（66年3月まで）。12月27日，アメリカ合衆国へ出張（コロンビア大学東アジア研究所高級研究員として日中関係史を研究）。この年，「中共史研究ノート」（『東洋学報』第43巻第2号，東洋学術協会，1960年）；「広東コンミューン史稿」（『歴史学研究』1961年第2号（第250号），青木書店）；「日本人の中国観――鈴江言一をめぐって」（『思想』1961年7月号）刊行。“Hai-lu-feng: The First Chinese Soviet Government”（part 1, part 2）, *The China Quarterly*, Vol. 8, Vol. 9（Dec., 1961, Mar., 1962）（1958年和文論文の英訳）。

1962年　この頃，被爆以来の白血球減少症治癒。この年，『世界の歴史14――第一次大戦後の世界』（江口朴郎編，中央公論社，1962年，軍閥混戦，五・四運動，ワシントン体制，中国国民党と中国共産党執筆）；『世界の歴史15――ファシズムと第二次大戦』（村瀬興雄編，中央公論社，1962年，南京国民政府と田中外交，満州事変から冀東政権へ，中華ソヴィエトと中国共産党，日華事変，戦争とアジアの諸民族執筆）刊行。

1963年　2月14日，帰国。

1964年　4月，一般教育科目の国際関係論を担当（84年3月まで）。

1965年　この年，「京奉線遮断問題の外交過程――田中外交とその背景」（篠原一・三谷太一郎編『近代日本の政治指導――政治家研究第2』東京大学出版会，1965年）；「田中義一と大陸進出」（『中央公論』第80巻第1号，1965年1月号）公刊。

1966年　この年，第一回吉野作造賞受賞。『無告の民と政治――新生日本外政論』（番町書房，1966年）刊行；『中共対日発言の内容分析――1958年の二つの時期における人民日報を材料として』（外務省アジア局中国課，1966年）印刷；『孫文全集』上中下（外務省調査部編，原書房，1967年復刻）解説。

1967年　6月1日，東京大学教養学部教授に昇任，引続き現代社会第二講座を担任。この年，『中華民国を繞る国際関係1949–65』（アジア政経学会『現代中国研究叢書』4，1967年）刊行；宮崎滔天『三十三年の夢』（平凡社東洋文庫，1967年，宮崎龍介・衞藤瀋吉校注）。（以下略）

このように，衞藤先生の青年期は，大学入学間もなく学徒動員された二等兵として始まり，広島で被爆した被爆者として戦後の混乱期，先生ご自身の体験に即して名づければ，いくつかの面での「格闘期」に接続することになるものであった。復学した大学では「何故学問をするのか」という問いに深刻に向き合い，演習の指導教授から深い影響を受けた。1949年に東洋文化研究所の助手に選ばれると，当初は清朝史研究を志したが，東洋文庫などで原資料との邂逅に恵まれ，アヘン戦争など，東西両洋間の世界史的関係の変化について，注目すべき解釈を施した二つの助手論文で学会にデビューされた。1952年から始まる1950年代の先生の学術論文出版ラッシュは，量的にのみならず質的にも，今更ながらに驚かされるものがある。一つのジャンルから次のジャンルへと，自らの疑問を解こうとし，学問的に解明しようとする意欲には止めどがなく，また，それを可能にする該博な知識と方法論的な明晰さに溢れておられた。

先生が自らに課しておられた学問的努力の側面につながるのは，「国際的な学問への努力」であった。海陸豊ソヴエトの「発見」は一躍先生を中国共産党研究の国際的舞台の最前線に押し上げ，日本の現代中国研究の評価を高めたのである。その間に，先生は東大教養学部（駒場）で東アジア国際政治史の講義と演習を担当する助教授に着任され（1956年），以来定年（1984年）まで，新しい学問分野の教育と研究の推進に邁進されることにもなったのであった。なお，先生は多面的な変化の50年代に入る直前に結婚され，50年代前半に 1 男 2 女に恵まれて，私生活の面でも大きな安心を得られた。

2　衞藤先生と荒木貞夫インタビュー

さて，問題の荒木貞夫インタビューである。お気づきのように，衞藤先生側から得られる履歴・業績資料には荒木貞夫との交流の痕跡はない。

筆者が衞藤先生に初めてお会いしたのは，先生がロックフェラー財団の支援により，カナダ，アメリカ，ヨーロッパ，中東，アジア諸国におけるアジア研究の状況を視察して廻られた 1 年間の世界一周旅行から帰国された1959年11月

初旬であった。先生のご帰国が科目登録の最終日より遅れ，教室で先生をお待ちしていたのは，筆者を含めた3人の教養学科3年生だけであった。その3人だけで「極東国際政治史Ⅰ」の講義を半年間聴く贅沢な授業であった。翌年には「極東国際政治史II」，「極東国際政治史Ⅰ」の聴講者もぐんと増え，「演習」は，先生の指導が厳しいながらも内容がヴァラエティに富み，一躍人気科目になったのである。今井清一，藤原彰，野村浩一，関寛治，秦郁彦など，太平洋戦争を扱った歴史研究書の著者として有名な他大学の若手の先生方を衞藤先生がゲストとして招かれ，お話を伺うことから始めて，生き残られた軍人，外交官をお呼びしてお話を伺い，次の年には学生たちがもっとも興味をひかれた1人に絞り（例えば石原莞爾，とその関係者），インタビューに出かけるなどして調べ上げる授業は，学生たちを興奮させるに十分であった（衞藤先生の「極東国際政治史演習」の授業については，関智英・村田雄二郎「[インタビュー]満洲研究から国際文化関係論へ――平野健一郎氏訪談録（上）」（『中国研究月報』第73巻第7号（2019年7月），22–24頁も参照されたい。）。

インタビューのアポイントメントは先生ご自身（あるいは衞藤研究室）が取ってくださることが一再ならずあったと記憶する。この度，先生が東洋文庫近代中国研究委員会のメンバーとしてオーラル・ヒストリーのプロジェクトを実現させようとされたことが研究会の文書記録，録音記録と共に発見されたことは，当時の先生に国際関係史の研究と国際関係論の教育の両面で先駆的なオーラル・ヒストリーの企てを同時進行させようとするお考えがあったのではないかと思わせるに十分である。しかし，筆者には先生がそういうお考えをお持ちだったと伺った記憶はまったくない。荒木貞夫という極めて特徴的な人物名と共に先生がそういう計画をお持ちだったと一度でも伺っていれば，絶対に忘れる**はず**がないと確信するだけに，そういうことはなかったと自信を持ってふりかえることができる。

おわりに——初めて伺う衞藤先生のオーラル・ヒストリー

本書に寄せられた論考の一つで，瀧下彩子氏は現在の日本における歴史教育の課題である「歴史総合」に論及しておられる。まことに慧眼であると思う。戦後日本の歴史教育においては常に「歴史総合」の議論が必要とされ，現にその議論は絶えず行われて来たのだと思う。1950年代，戦後の新制大学における教養教育の模索がその第1弾であった。衞藤先生の多数のジャンルをまたいでの，矢継ぎ早に息せき切った学術論文の公表は，新しい分析方法へのチャレンジや分析工具の工夫も含めて，戦後日本社会の平和と革新の試みであった。自らの心身に刻み込まれた痛みに，合理的な説明を求めても答えが得られない場合は，答えを諦める以外にないのであろうか。戦後復興に「国際化」の努力をより効率的に盛り込むことができていたならば，戦後70有余年にしていまだに「歴史総合」を模索しているような境地を脱却しえていたかもしれない。

関智英氏の論稿は，戦前昭和の軍人の無責任ぶりを大衆化著しい戦後昭和の日本社会に移したらどうなるか，日本社会の無責任ぶりを活写している。

矢野真太郎氏は荒木貞夫氏のインタビューの特徴を「脱線が多い」こととし，インタビューワーの衞藤氏がその脱線をそのまま残していることをも「脱線が多い」という特徴に加えている。「ツボ」を抑えた見事な評論になっている。

衞藤先生は授業で取り上げる人物，特に軍人について，「この人物は本物か，本物でないか，で見分ける」といわれた。脱線した部分をそのままにして，「本物」判定の材料に使われることさえあったように思う。時には学生に対してもこの判定法が使われ，それが「厳しい衞藤先生」として現れることになるのであった。

最後に話は飛ぶが，生前の衞藤先生が最後に残された座談記録の一つが上智大学『ソフィア』2006年春季第55巻第1号（第217号，2007年2月15日発行）に掲載された衞藤瀋吉・ヨゼフ・ピタウ・安野正士「〈対話〉戦争の記憶と国際関係——東アジアと日本の過去と未来——」である。鼎談の冒頭，先生は

淡々と次のように自己紹介をされた。

衞藤：昭和十八年の十月に東大の法学部に入学したのですが，十二月には学徒動員になって，熊本の歩兵第十三連隊に入営させられました。

安野：では神宮球場での有名な壮行会にも参加されたのですか。

衞藤：はい。雨の中を分列行進しました。最初は二等兵として入営したのですが，幹部候補生の試験を受けろ，と上官に言われ，それに合格して通信兵に転科させられ，陸軍通信学校で中途半端な通信教育を受け，大本営の広島第二通信隊に送られました。……

安野：そこで八月六日に被爆されたわけですね。

衞藤：そうです。広島駅の北側の，爆心地からは二キロメートルくらいのところで被爆しました。……サンフランシスコからの日本語短波放送〔で〕，ああ，空襲が来るな，とは思ったのですが，焼夷弾による空襲だとばかり思っていましたし，夜来るものだとばかり思っていました。ところが朝の八時十五分に爆弾が落ちました。私は屋内にいたので，爆風で飛ばされた破片による傷ですみましたが，屋外にいた隊員はひどい火傷でした。その後何日かの間，その辺に散らばっている死体や，川の中に流れている死体を集めて埋葬する作業に従事しました。その結果私も白血球減少症にかかり，数年の間苦しみましたが，幸いに回復し，子供にも恵まれました。

先生は，軍部の作為か不作為によって，その一身に学徒動員と広島での被爆という運命的な二重の不条理を加えられたにもかかわらず，自らが選ばれた「国際政治史」という専攻分野の研究と教育の場面において，それを言立てしようとは一度もなさらなかった。その生を間もなく閉じられるに当たって一度だけ，穏やかに語り部の役割を果たして，貴重この上ないご自身のオーラル・ヒストリーを完結されたといえよう。